

坂本、瀬谷支隊の台児庄撤退の経緯 (二)

—— 台児庄反転関係電報綴を通して

姜 克 實

四、坂本支隊の反転遅延

一方、瀬谷啓支隊長が秘密裏に支隊の撤退計画を部署している間、坂本順支隊長のほうは次第に「敵を撃滅」する戦意が高まってきた。理由は二つあると考えられる。一つは4月6日、敵の包囲強化による戦闘局面の緊迫化であり、全支隊の安全脱出のために、当面の敵、とくに後退方向にあたる北側の敵を撃破する必要が生じた。「瀬支作命第七十八号」に坂本支隊の四個大隊は敵の四個師（四万人以上）に囲まれ苦戦した様子を記録している。

坂本支隊ハ四月六日朝主カヲ以テ東庄（台児庄東方六軒）、火石埠、辛庄、賀庄、三河口、邢家楼ノ線ニ一部（歩二一聯隊）ヲ以テ堡子、蔡庄、大顧珊、朱庄、郁庄、堡子ノ線ニ於テ東西二面シ悪戦中ニシテ 敵ハ第六師ヲ以テ古梁王城、劉庄、後堡、西黄石山、第一三九師ヲ以テ李庄、岔河鎮間ニ、第二十七師ヲ以テ黄淵、東范墩、楊庄、溝徐、郁庄間ニ、第一一師ヲ以テ尋家庄、沙溝凹、平灘、老宅、堡子、顧珊、朱灘、大庄子、丁灘、常溝間ノ地区ニ在リ 坂本支隊ノ騎兵隊（支援歩兵三中隊ヲ有ス）ハ向城ニ於テ敵第二師ト交戦中¹。

まさに四面楚歌の状態であり、また、輸送線の重鎮向城が包囲され補給路も敵に切断されたために、弾薬も欠乏し、「五日には第十師団から弾薬、糧食の補充を受ける状況であった」²。

今ひとつは、上級の第五師団と第二軍からの度重なる注意と命令であった。

6日1013、済南の第二軍参謀長（鈴木率道少將）から義堂集にある第五師団参謀長（桜田武大佐）宛に、坂本支隊の「反転」に関する軍の意見が示された。

板参乙第三三七電ノ御決心全然同感台児庄東北方面ノ情況ハ尚坂本支隊ノ努力ニ俟ツモノ多シト判断シアリ 為念³

「板参乙第三三七電」とは、前に触れた4月5日午後、第五師団が反転命令下達後、第二軍に対する報告の電報であり、これに対し、第二軍側が「反転」計画に「全然同感」と受け入れながら、念を押ししたのは「台児庄東北方面ノ情況ハ尚坂本支隊ノ努力ニ俟ツモノ多シ」という部分であり、言い換えれば、反転開始する前「敵を撃滅」する結果を期待する電報であった。

曖昧な表現で5D〔第五師団〕側に誤解を与えないように、1700、第二軍小沼〔治夫〕参謀から

軍ノ企図ハ坂本支隊ヲシテ当面ノ敵ヲ撃滅シタル後沂州方面ニ転進セシムルニ在リ 坂本支隊ヲシテ明日七日モ是非依然攻撃ヲ続行セシメラレ度 右依命（傍点は引用者）

の追加説明があった⁴。反転するまえ、先ず「敵を撃滅」作戦に専念せよ、という意味のダメ押しである。以上の軍の意思をうけ、4月6日午後3時、第五師団は直ちに坂本支隊長に対し次の指示を出し、積極的な攻撃作戦を要請した。



図1 台兒庄附近彼我要図

貴支隊沂州方面へノ転進ノ件 板参甲第二〇七号ノ通りナルモ 其後一ノ報告ニ依レバ敵ハ台兒庄北側地区ニ於テ我ト決戦ヲ企図シアルモノノ如シ 此際支隊トシテ東方ヨリスル此敵攻撃企図ニ対シテ瀨谷支隊ト協力ニテ完全ニ之ヲ破摧セラル後 殘敵ヲ掃蕩シツツ向城ヲ經テ沂州方面ニ前進セラルヘキヲ希望ス⁵。依命。
(傍点は引用者)

沂州反転するまえ、瀨谷支隊と協力して台兒庄北側地区にある敵の主力を破摧させる要請で、いわば「一撃」作戦への具体的な指示である。なお、別の「軍電第八〇〇号」によれば、軍の意図を受けて第五師団参謀長は前線の坂本支隊長に、一撃の方針を「五日夜以来三度電報ニテ指導」していた⁶という。この軍と師団の強い要請を受け、苦戦中にも関わらず、坂本支隊長はこの反転の前提となる戦いに真剣に取り組まざるを得なくなり、瀨谷支隊に作戦の協力を得べく、新たな調整を行うことになった。

4月6日20時、坂本支隊長は瀨谷支隊がすでに後退開始中の事実を知らないまま、師団参謀長及び瀨谷支隊長宛に次のような電報を発送した。

- 一、台兒庄ノ敵ハ頑強ニテ瀨谷支隊ハ未ダ三分ノ二ニ掃蕩セルニ過ギザルナリ
- 二、支隊ハ火石埠、辛庄、蕭汪、賀庄、蔡庄、大顧珊、郁庄ノ敵ノ右ニテ六師 一三九師 一一一師ノ敵ヲ攻撃中ナルモ彈藥欠乏シ 攻撃ノ進展意ノ如クナラス又老宅 朱庄、丁灘、常溝、馬庄付近ニ約一ヶ師ノ敵迂回

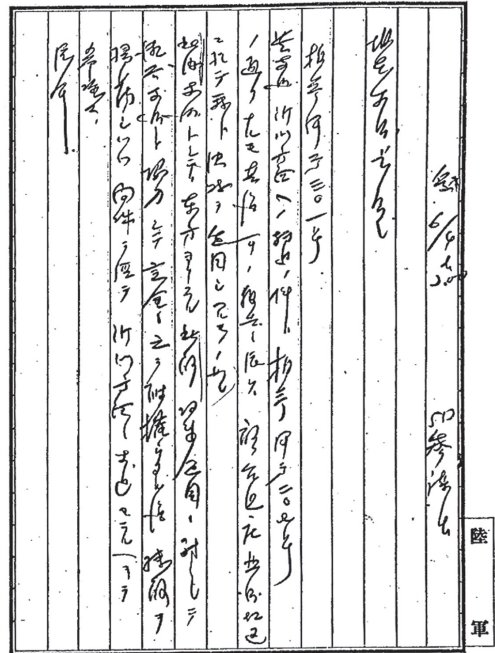


図2 板参甲第三〇一号電報

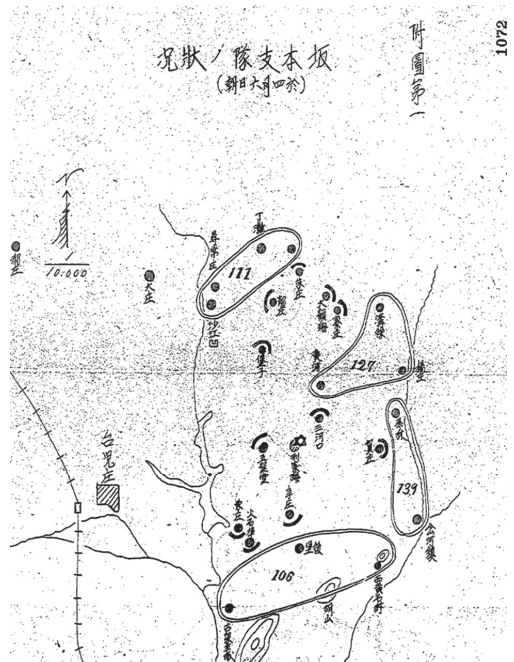


図3 坂本支隊の状況

シアリ

三、右ノ状況ニ基キ支隊ハ瀬谷支隊ト協力シ同支隊有力ナル一部ヲ以テ敵ノ包囲翼ノ背後ヲ攻撃スル如ク一致協力当面ノ敵ヲ撃破スルヲ目下ノ急務トスル為 沂州反転ハ十日後ト判断セラル

四、LPW SAハ未タ掌握セス⁷（傍点は引用者）

反転の再度遅延である。当面の敵の包囲を撃破するため、反転の時期を十日以降に延ばし、弾薬の補給を受けた後、瀬谷支隊と一致協力して「敵の包囲翼の背後を攻撃」する、という坂本支隊長の戦線不離脱の決意である。包囲され苦戦中の坂本支隊にして、この一撃作戦を実行するためどうしても欠かせないのは、瀬谷支隊側の協力である。昨日来の沂州反転計画によってくすぶった瀬谷支隊長の不安、疑念を一掃し、両支隊の協力体制を整えるため、坂本支隊長は一時間後、瀬谷支隊長宛に「坂作報第二五七号」（瀬谷第九三号返）電を發し瀬谷少將を安堵させようとした⁸。

一、支隊ハ貴支隊ト一致協力、当面ノ敵ヲ撃破シタル後ニ非シハ沂州ノ転進セス

二、本件ハ師団參謀長ヨリモ指示アリ 為念（傍点は引用者）

この電報は午前8時、瀬谷の「如何ナル時機ニ転進ヲ開始セラレル預定ナリヤ至急承知致度」との問合せ（「瀬谷第九三号」）に対する返電であり、戦闘継続と反転延期という不退転の決定と意思を示す目的があった。俺は決して友軍を見捨てる卑怯者ではないと、坂本は「義理」を示すが、この時、瀬谷支隊はすでに撤退中である事実を、知る由はなかった。

つぎに示すのは、瀬谷が坂本に出した日付不明の電報であるが、内容から判断すれば、以上の坂本の電報を受けた後、坂本の新計画に対する返事である。

一、貴支隊ノ御健闘ヲ切望シテ止マス

二、貴支隊トシテハ当支隊カ多少戦線ノ整理ヲ行フトモ極力現在線ヲ保持シ有力ナル一部ヲ以テ北方（常溝付近）ニ向ヒ攻勢ヲ採ラレタシ

三、支隊ハ明日払曉ヨリ貴隊左側背ヲ包囲シアル敵ニ対シ其側背ヨリ全カヲ挙ゲテ攻撃スヘキヲ以テ万難ヲ排シ之ノ策応セラレシ事ヲ望ム⁹（傍点は引用者）

当方の「戦線整理」（後退）の事実を坂本に仄めかしながら、先方（坂本支隊）による現在線の保持および、有力なる一部をもって北方の敵を攻撃し、瀬谷支隊の作戦（一撃）に策応してほしい要請であり、一撃作戦に対する全面協力を約束するものであった。

この電報を發送した時間は、4月6日午後2100前後ではないかと思われる。瀬谷支隊の主力はこ

の時、泥溝への転進中であり、翌日予定した「一撃作戦」も同時に着々と準備中であつた。朝から行動を開始した歩兵第六十三聯隊第一大隊はすでに敵包囲網の側後部の楊楼（攻撃出発地）付近に進出して攻撃準備に入り、後続の第三大隊も、6日夕方、台児庄戦場を抜け、夜色に乗り潘墜〔壘〕（集結地点）に向かって北進中であつた。なお歩六十三の戦闘詳報によると、この日1530下達した瀨谷支隊長の撤退命令に含まれる「一撃作戦」の内容は、主力（二個大隊）をもって「朱庄ニ向ヒ敵ヲ攻撃シ歩二一聯隊ヲ救援シタル後同聯隊ト協力シテ餓虎橋附近ノ敵ヲ撃破スヘシ」であつた¹⁰。

五、裏切られた坂本支隊長の怒り

4月7日夜が明けると、台児庄城内及び北側の広い戦場にはもはや瀨谷支隊の姿はなかつた。坂本支隊の左（西）側が空けられ、中国軍は続々と北上して追撃前進中である情報を坂本支隊が掴んだ。青天の霹靂である。坂本支隊長は動揺し、友軍に裏切られたような気もしただろう。その動揺ぶりは、この日朝0600瀨谷支隊長宛に打電した「坂作報第二六一号」の電報から窺える。

- 一、台児庄方面ノ敵ハ北進シ坂本支隊ノ左側ヲ攻撃スルノ惧アリ 瀨谷支隊ノ之ニ関スル判断及刻意
- 二、瀨谷支隊主力ノ攻撃部署概要
- 三、坂本支隊背後連絡線特ニ補給点ハ何レニ設定セラレアリヤ 右至急返待ツ¹¹

空けられた台児庄北側の戦場と敵方追撃部隊の進出は、坂本支隊にとって、新たな西方からの脅威となつていた。また瀨谷支隊が撤退したため、これまで第十師団の補給線に頼っている坂本支隊は、補給線と補給点の確認、確保も問題となつたようだ。なぜ瀨谷支隊は無断で後退し、左側（西）を敵に譲つたか、一撃への協力を約束しながら、瀨谷はどのように攻撃を部署していたのか、坂本支隊長は混乱し、瀨谷の「刻意」の理解に苦しんだ。もはや敵を「一撃」するところではない、それより我が身の安全を確保するのが優先すべき課題となつた。危機感が増した坂本支隊長は朝から、安全脱出の計画を考え始めたのである。戦意を喪失した坂本支隊長の様子は4月7日0820瀨谷支隊長宛のつぎの電報「坂作報第二四六号」から窺える。

- 一、台児庄北側地区ヲ開放セラレタル為 此方面ノ掩護兵カヲ要スルニ付劉庄、老庄、朱庄、丁灘、常溝、平灘、沙江凹、黄庄ノ敵ヲ瀨谷支隊ニ依テ撃攘セラレタシ
- 二、支隊ハ本夜五聖堂、疆在溝、関庄、堡子、郁庄、常溝、楊楼、馬庄ヲ経テ响連屯ニ後退、兵カヲ集結シタル後沂州ニ反転ス
右ニ関スル瀨谷支隊ノ意見 至急返¹²

台児庄北側（坂本支隊の西）は瀬谷支隊の後退で敵に開放されたため、坂本支隊にして此方面に対する警戒の兵力が新たに必要となった。そのため、北側一線の敵は、瀬谷支隊の「撃攘」を頼む、という意味に採れる。北側の敵（坂本支隊左側背後）に対する南北一斉の挟み撃ちは、これまでの「一撃作戦」の段取りであるが、今のような状況下で、当方としてもはや元の計画に協力する余裕はないことを仄めかしている。この電報には坂本支隊の反転の時期、後退のルートなどの情報を明示したのも特徴である。いざ撤退中問題が生じた場合、掩護してもらふ意図であろう。

一方、東にも西にも退路のない坂本支隊にとって、北側（瀬谷支隊攻撃予定方向）への脱出は唯一の活路でもあるため、これを確保する意味においても、北に向かって進撃しなければならなかった。坂本支隊にとって、一撃作戦の攻撃に全力を上げ策応することは、死活にかかる問題でもあった。1130北に攻勢を取る坂本支隊長は瀬谷支隊長宛に

- 一 常溝ヲ占領セリト称スル歩兵第六十三聯隊ノ現在位置至急知ラセ
- 二、片野部隊ハ郁庄平灘ヲ占領シ極力之ト連絡ニカメアルモ未タ連絡トレス
- 三、支隊ハ平灘尋家庄馬庄付近ヲ…紅瓦屋屯付近ニ後退セントス 右意見承り度

と連絡した¹³

脱出路確保のため懸命に瀬谷支隊と合流しようとする坂本支隊側の様子である。この時、郁庄、平灘に北進した坂本支隊の歩兵第二十一聯隊は、底閣、楊楼一線で敵の側背後を攻撃している瀬谷支隊歩兵第六十三聯隊との間に、まだ直線で五キロの距離があり、この地域に、敵第一一師の大軍が進入し北からも南からも戦闘の展開に困難を極めた。

1200坂本支隊長は瀬谷支隊長宛に「坂作報第二六七号」を打電し

台児庄方面ノ敵ニ対シテハ低石橋西北方約一軒黄庄其西方二軒張楼其西北側小集八日払暁迄確保スル事絶対要件ナリ 配慮ヲ乞フ¹⁴

と懸命に連絡したが、通信がうまくいったか、どうかは定かではない（返電は見つからない）。この電文内容は、坂本支隊の安全「転進」のため、退路の西側（黄庄、張楼、小集）を確保してもらう要請であり、8日払暁まで、坂本支隊はここを通る計画を瀬谷に知らせるものでもあった。

こうして「一撃作戦」は、一転して坂本支隊の撤退ルート確保の作戦に変貌し、一刻も速く台児庄周辺の煩雑から抜け出すことは、坂本支隊長の最大の目標となった。

あとに触れるが、実際この日に行われた「一撃作戦」は、歩兵第六十三聯隊の戦闘力低下と敵の頑強な抵抗の前でほとんど進展はなく、当然、この一撃不発の状態下で坂本支隊の撤退も危険にさらされた。坂本支隊長がいかにして日没後の反転行動を安全に行えるかと苦慮している間、まるで

この危機状態を知らないかのように第二軍側からまたしても師団に「…台児庄東北方地区ノ現況ハ尚未タ坂本支隊ノ協力ニ俟ツコト頗ル大ナルヲ以テ反転ノ時機再度考慮方」という転進阻止の電報が入るが、さすがに第五師団側も堪忍袋の緒が切れた。

右何レカノ誤電ナルヘキヲ信スルモ反転ノ時機ニ関シテハ前電板参甲第三〇一号ノ趣旨ニ基キ行動シ九切ノ功ヲキニ欠カサル様重ネテ命ニ依リ¹⁵

と、坂本支隊の転進開始を促す。

この時（4月7日1730）、台児庄の北方の一円に、瀬谷支隊の後退を追撃しようとする、北上してきた中国軍の主力が充満し、昼から坂本支隊長が努力して目指した、北方戦線における敵の撃破も、西方面の安全確保もできずにいた。このままでは一步間違えば、撤退中の坂本支隊は優勢な中国軍に邀撃され大損失を受ける事態になりかねない。

このような危険の中、日没後、八方ふさがりの坂本支隊は敵と膚接しながら必死の転進を開始し、夜暗を利用して西北方に撤退した。この後退は中国軍に察知されたが、幸い、積極的な攻撃を受けることなく、次の朝、予定した紅瓦屋屯付近で支隊が無事集結したのである。

翌8日朝、「近ク開始セラルヘキ徐州作戦ノ為」「第二軍ハ第五師団坂本支隊ヲ第十師団長ノ指揮ニ入ラシム」ことが決定され¹⁶、この配置転換で「沂州反転」の計画もたち消えた。第二軍が受けた新たな任務は、台児庄附近に雲集する敵の主力（合計33個師）をこの地に釘付けさせる「誘引作戦」の遂行で、徐州攻略の準備を容易ならしめるための新たな部署であった。配属転換の前、板垣征四郎師団長は坂本順支隊長に、次の電報を打って、この間の苦労を労った。

一、連日連夜ノ御奮闘真ニ感激ニ堪エス

二、今ヤ敵ノ主力台児庄東北方地区ニ集中シ攻勢ヲ企図シアルニ対シ貴支隊並瀬谷支隊力寡兵以テ補給ノ不如意ト困苦缺乏トヲ克服シツツ 攻勢ヲ執リツツアル心情真ニ想像ノスルノ余リアリ

瀬谷支隊ハ泥溝方面ヨリ主カヲ以テ蘭陵鎮方面攻撃前進中ニシテ 茲一両日ニ最も重大ナ時機ナリ貴支隊ニ宜シク万難ヲ排シテ進而テ敵攻撃ニ継続シ更ニ緊禪一番以テ有終ノ成果ヲ収メル事ヲ望ム

沂州方面反転ニ関シテハ此後何等考慮スル事ナク一意当面ノ敵殲滅ニ命綱ノ努力ヲ拂ワレシ事ヲ附言ス

尚補強特ニ彈藥ノ補充ニ関シテハ不断ノ努力ト考慮ヲ拂フ様軍及第十師団ニ要望シ置キタリ¹⁷

危機一髪で難を逃れた坂本支隊長はもちろん、この師団長の慰めで怒りが収まるわけではなく、翌4月9日、反転経緯に関する報告の中で、瀬谷支隊への憤激を爆発させた。

瀬谷支隊トノ連絡ハ軍無線ナキ為極メテ困難

反転ニ関シ5/4后8：30発信坂作報第二四四号ヲ以テ「三佛楼附近ノ兵力集結ノ予定ナル旨」通報シタル所 板参甲第三〇一号ニ依リ更ニ坂作報第二四五号ヲ以テ「支隊ハ沂州ノ反転ニ命ゼラレタルモ当面ノ敵ニ一撃ヲ與ヘタキ旨」通報シ支隊トシテハ緊密ニ瀬谷支隊ヘ連絡セシモ 六日夜ニ至リ瀬谷支隊ハ何等連絡ナク泥溝ヘ後退 支隊ヲ孤立セシメタリ 六日昼ル 連絡者ニ組派遣セシモ後退ニ関シ何等意思表示ナク遺憾此上ナシ 昨七日夜ノ反転ハ近迫セル敵ノ銃砲火ノ下ニ実行セリ 八日払曉迄 瀬谷支隊副官連絡シ来リ 万事連絡不到ノ原因判明 後刻詳報 奥参謀¹⁸

この怒りは一、当方は一撃作戦のため、当初の反転計画を中止し戦闘の協力に専念している間、瀬谷支隊は連絡もなく無断で泥溝に撤退したこと、二、そのため支隊は敵の包囲の中で孤立し、近迫せる敵の銃砲火の下で危険な転進を強いられたこと、三、六日昼、派遣した連絡者二組に対して、瀬谷支隊側が転進計画を伝えなかったことにあった。とくに第一と第三点に、坂本の怒りが集中した。坂本支隊の連絡官はいずれも、転進命令下達の前1530前に来たと思われるので、軍の守秘規則により、瀬谷は未下達の極秘命令をさきに友軍に知らせる訳にはいかなかったと思われる。

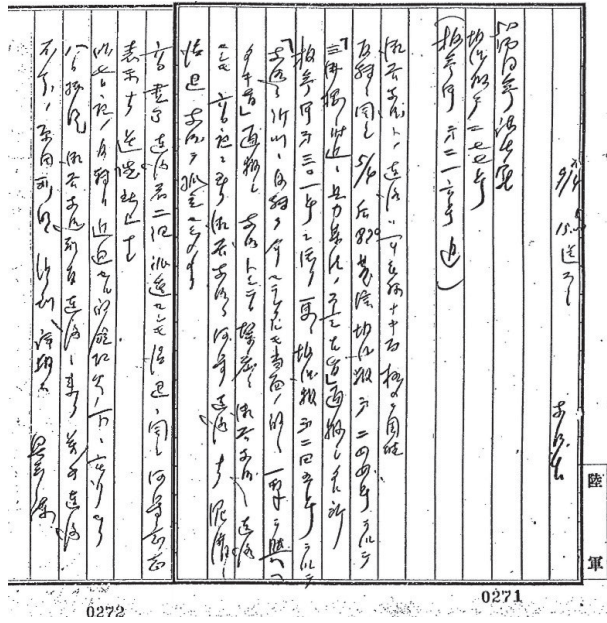


図4 坂作報第二七七号 電報

以上は「坂本支隊反転電報綴」の史料から復元した、日本軍の台児庄より撤退、反転の一部始終である。作戦の不利にもかかわらず、軍、師団側の終始一貫した強腰の攻撃要請。作戦の度重なる失敗から生まれた瀬谷支隊長の諦観と言えぬ心算。早く脱出したい願望と「一撃作戦」の厳命に挟まれた坂本支隊長の苦悩。そして苦戦中の友軍を見捨てきれない義理人情、裏切られた時の怒りなど、各部隊、部署間の微妙な人間関係の機微が読み取れ、非常にドラマチックに感じる。

六、「一撃作戦」の失敗

「沂州反転」を指示しながら坂本支隊の反転計画を邪魔し、遅延させたのは、軍と師団の参謀部側が繰り返し要請した「一撃作戦」——当面の敵を撃滅する——という前提条件であり、これは主として坂本支隊の左側背後に進出し包囲翼を形成した敵一一師の撃破を意味した。この要請された一撃作戦は、瀬谷支隊の無断後退から生じた坂本、瀬谷両支隊間の意思疎通不調和の中、4月7日に行われた。

この日、坂本支隊南線の火石埠、堡子の陣地で朝から悪戦がつづき、北線の平灘、郁庄に位置する片野部隊も激しく消耗し、陣地を守るだけで精一杯だった。そのため実際北に「一撃」する余裕がなく、もっぱら北より瀬谷支隊側の突破、来援を待つしか、手のつけようはなかった。こうして、作戦成功の鍵は、北線より瀬谷支隊側の攻撃にかかることになった。

瀬谷支隊長はこの一撃作戦に投入したのは、台兒庄攻撃で鋭気を消耗しきった第二大隊を除く、歩兵第六十三聯隊の二個大隊であった。

前にも触れたように、瀬谷支隊長が撤退する前の4月6日払暁、「一撃作戦」の布石としてまず歩兵第六十三聯隊の第一大隊を台兒庄城の東側戦場から撤収し、敵一一師の後方（北方）に向かわせた。その第一大隊は警備のため「一小隊を台兒庄東南角に残置」し、第三中隊を尖兵として北に向け前進させた¹⁹。潘陞〔壘〕、岔路口を経て、「六日午前九時三十分張樓付近ノ敵約二百ヲ撃破」した後、1150小集の敵約200名を攻撃し、東東北方向に「敗退」させた。午後1500時、河湾附近の敵を駆逐して柿樹園に進出し、さらに楊樓方面に退却する約500の敵を追撃して午後1800時、目的地の楊樓を占領した²⁰。楊樓は台兒庄の北北東15キロの地点にあり、坂本支隊の歩兵第二十一聯隊を包囲する敵一一師の側後部に位置し、いわば「一撃作戦」における瀬谷支隊の攻撃開始の予定地点である。

この日（4月6日）の日没後、瀬谷支隊の全面撤退が始まり、事前の計画に従い、「一撃作戦」に参加する歩兵第六十三聯隊の主力（本部と第三大隊、10A砲兵一大隊）は潘陞〔壘〕に集結した後、楊樓の方向に前進し、翌7日朝河湾、馮家湖、柿樹園を通過して1040、戦闘準備の態勢で楊樓西の無名集団部落に到着した。戦闘部署のあと攻撃は1120に開始した²¹。

戦闘に参加したのは歩兵第六十三聯隊第一と第三大隊及び独立機関銃第十大隊の一個中隊、野砲兵第十聯隊の約半分、総勢2518名、馬882匹の部隊であり²²、福栄聯隊長は自ら指揮を執っていた。

聯隊は敵一一師の司令部所在地朱庄（楊樓南西7キロ）の攻撃を企て、先着の第一大隊を右側第一線、第三大隊を左側第一線に配置し、双方向より一斉に前進した。第三大隊は敵に接近する途中、まず楊樓北西方一キロの底閣鎮周辺に敵の配兵を発見し、1120第十二中隊を先頭に底閣への攻撃を開始した。敵は底閣附近六つの集落陣地に分散し、「兵力約四百」と報告されている²³。

敵の抵抗は極めて頑強であった。攻撃を担当する第十二中隊は、敵前6-700米附近から敵陣より機関銃、重迫撃砲の集中射撃を浴び、3-400米の線附近に至ると「将校以下死傷間発シ前進稍々遅

このように、底閣での戦闘は「翼ハ奪取スルニ至ラス日没トナル」ため、攻撃を断念せざるを得なかった。戦闘詳報によれば、底閣陣地で交戦する敵は第二十五師の部隊であり、堅牢な陣地と重迫撃砲火の支援をうけ、数的に上回る日本軍の攻撃を見事に食い止めた。台児庄から撤退した日本軍は、もはや前のような鋭気はなかったように見える。

一方、右側第一線における第一大隊の攻撃も順調ではなかった。

此間第一大隊ハ晁村、大庄子、老宅、朱庄ノ敵ヲ攻略シ朱庄ニ進出ヲ企図シ 協力野砲兵大隊ト協力シ午前八時三十分楊楼東側無名部落ヲ攻略 其東端ノ線ニ進出シ続イテ午後一時三十分晁村ノ敵ニ対シ攻撃ヲ開始シ 其熾烈ナル敵火ヲ冒シ頑強ナル抵抗ヲ排除シ力戦奮闘午後五時二十分晁村東端ノ線ニ進出シ爾後ノ攻撃準備中²⁵。

第一大隊の戦闘詳報をみると、1700中川大隊長は「作命第七十一号」を出し、「前面ノ敵ヲ速ニ攻略シ大庄子方面ニ追撃セントス」と命じたが²⁶、結果的に「大庄子」（晁村南南東3.8キロ）方面の進出を断念し、晁村東の線で停止した。理由は聯隊の1730の転進命令だと戦闘詳報が記すが、攻撃中の転進命令はやはりそれなりの理由があろう。第二中隊の戦闘詳報に次のように記している。該部隊は晁村の西方陣地を奪取し東端に進出するや、

敵ハ晁村東集団部落ヲ拠点トシ…我前進ヲ見ルヤ果然熾烈ナル火力ヲ我ニ指向セリ 特ニ晁村東部落ノ敵ハ我砲撃意ノ如クナラス砲ノ協同不利ナルヲ察知シ頑強ニ抵抗ヲ続ケ 力行努ムルモ死傷者ヲ増スノミニシテ戦闘意ノ如クナラス²⁷

つまり「死傷者を増すのみにして戦闘意の如くならず」は攻撃中止の理由であった。「本戦闘ノ成績」について、第一大隊の報告では「大隊ノ迅速果敢ナル追撃ニ依リ随所ニ敵ヲ破碎楔入シテ之ニ徹底敵打撃ヲ与ヘ…支隊ノ側背ヲ掩護シ聯隊ノ任務ヲ達成セシメタリ」と自画自賛するが²⁸、実際聯隊の右側第一線の攻撃も、一連の目標の第一歩たる晁村で食い止められ、地図を確認すると、攻撃開始の楊楼付近から停止線の晁村東まで、前進距離わずか1000米ほどであった²⁹。

ようするに、この日の作戦における左、右両翼の攻撃は共に、敵の陣地前で食い止められ、奥地へ一歩も前進できなかった。四、五キロ先に敵の司令部朱庄があり、周囲の大庄子、劉庄、候宅、黄墩にも敵の密集部隊があった。午後三時三十分より、「敵約二師」は北東方向に「退却スルヲ認メ」ても、接近するすべはなく後方楊楼陣地から「砲兵隊ヲ以テ之ニ攪乱射撃ヲ加フ」るしか、手の施しようはなかったのである³⁰。

前に触れたように、坂本支隊は1130発の電報で「一、常溝ヲ占領セリト称スル歩兵第六十三聯隊ノ現在位置至急知ラセ、二、片野部隊ハ郁庄平灘ヲ占領シ極力之ト連絡ニカメルモ未ダ連絡トレ

ス」と懸命に瀬谷支隊と連絡を取ろうとしたが、この時点（4月7日1130）で、瀬谷支隊の一撃作戦はまだ開始したばかりで、攻撃の最前線となる晁村は片野部隊（歩第二十一聯隊）が到達した郁庄、平灘から9キロも離れていた。午後になって敵の砲火をくぐり抜け「坂本支隊歩二一聯隊連絡者来リ」、「歩二一聯隊ハ正午前後郁庄西南方ノ線ニ進出シアリ 貴隊ハ可成速ニ常溝或ハ尋家庄附近ノ敵ヲ撃破シテ遅クモ日没迄ニハ歩二一聯隊ト連絡トルヘシ」³¹と再び要請してきたが、この地に釘付けにされ、半日以上をかけて一キロほどしか前進できなかった攻撃の進捗ぶりを見れば、無理な注文であろう。こうして南北からの挟み撃ちで敵の包囲翼を撃破しようとするこの一撃作戦は、実際敵の防御線を突破できず、完敗したのである。

この日、晁村陣地にいる敵の数は「不明」となっているが、精々底閣と同じような400人程度ではないか。中国軍の戦闘詳報によると、この敵は第五十二軍閔麟徴の一部（二十五師）で、「我閔部（第五十二軍）主力は底閣、楊楼一帶にて昨日夜以来敵と徹夜激戦、白兵戦を交えて繰り返し争奪、敵我とも甚大なる損失を蒙り、遂に今朝に至り、敵を潰退せり」と記録している³²。

こうして歩兵第六十三聯隊の主力二個大隊および配属砲隊合計2518人となる日本軍の戦闘部隊は、この日全力を投入しても千人程度の敵陣を突破できず、死者30名、負傷94名の代価を払って攻撃中止となった。攻撃の失敗は、敵による逆襲の危険を生じることを意味し、そのため夜中の戦場離脱は、再び「隠密」裏に行われざるを得ない羽目になった。

4月7日1750福栄聯隊長より転進命令「歩第六三作命第二八一号」が下達された。

中川少佐ノ指揮スル部隊ハ日没後隠密ニ戦場ヲ離脱シ柿樹園ニ集合シタル後官庄ニ向ヒ前進スベシ

Ⅲハ午後十時隠密ニ戦場ヲ離脱シ腰裏徐ヲ経テ官庄ニ向ヒ前進スベシ…

とある³⁴。一日前の日没後の台児庄からの撤退と同じような要領であった。「隠密」の理由は言うまでもなく、日本軍の攻勢を有効に食い止めた、士気旺盛の中国軍の逆襲、追撃を恐れていたためであろう。この日（4月7日）の作戦中、台児庄における中国軍大捷のニュースは、すでに戦場を抜け国中に駆け巡っていた。

台児庄から撤退した歩兵第六十三聯隊は、出発の時点ですでに大量の要後送の負傷者を抱えており、4月7日の一撃作戦で、さらに124名の死傷者が増えた。これほどの死傷者を戦場から運び出し、さらに目標にされやすい900匹に近い馬、砲兵隊、行李の車輛などを安全に後方に撤退させることは決して容易のことではなかった。

当時第一線部隊ニハ死傷者多ク 之カ後送ノ為支隊長ニ自動貨車ノ派遣ヲ要求スルト共ニ第一線部隊ニ第一中隊ヲ協力セシメ急造担架等ニ依リ之ヲ（ハ）部落ニ移送後更ニ衛生隊位置

二後送セシメ 輸送機関不足ノ為聯隊本部及大隊大行李車輛若干ノ積載品ヲ棄テ之カ搬送ニ任セシム 請求自動貨車到着セス 概ネ午後九時三十分死傷者ノ収容ヲ終結後後送ノ準備ヲ完了ス³⁵

と戦闘詳報はこの緊迫した撤退の様子を記録する。さいわい

敵ハ守勢防禦ニ専念シ…搜索積極的ナラス四月七日我ノ戰場離脱ノ際ニ於テモ之ヲ探知セサルモノノ如ク 又底閣ノ北方ニハ直接我ノ攻撃ヲ受ケサル敵ニ～三百アリ又後方ニハ多数ノ兵力ヲ擁シアリタルカ如キモ 何等積極的ニ我ノ行動ヲ妨害スルノ挙ニ出テス³⁶

福栄聯隊は今度またもや、守備中心で進攻、反撃に消極的だった中国軍の戦法に助けられ、首尾よく夜逃げが成功したのである。

この日の戦闘では敵に与えた損害記録は、底閣方面の戦闘で敵の遺棄死体「目撃 約二〇」とあるが、晁庄方面は「不詳」となっている³⁷。なお晁村攻撃を担当する第二中隊の戦闘詳報では敵は「第二十五師第七十三旅」で「敵ノ遺棄死体 約二百」とされている。「夜暗ニ至リタルヲ以テ戰場掃除不十分」のため、この「約二百」の概数は聯隊の戦闘詳報に採用されなかったようだ³⁸。これも日本軍の真面目なところであろう。勝てないと戦場整理ができず、敵の死者数も統計できなかったことを物語っている。一撃作戦の失敗は、福栄聯隊自らの戦場離脱を危険にさらすことだけに終わらない。もっと重大な問題は、坂本支隊の撤退通路を確保できなかったことにある。これから行われる坂本支隊の転進には、さらなる困難と危険が待ち受けていた。

注釈

- ¹ 「歩兵第六十三聯隊台兒莊攻略戦闘詳報」JACAR：Ref. C11111253800. No. 1080-1081.
- ² 『戦史叢書・支那事変陸軍作戦（2）昭和十四年一月まで』防衛庁防衛研修所戦史室著、朝雲新聞社、1975年、37頁。
- ³ 「至急 於濟南第二軍參謀長→義堂集第五師団參謀長」前掲「台兒莊反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. No. 248.
- ⁴ 「小沼參謀→第五師団參謀長 坂本支隊長（参考）宛」前掲「台兒莊反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. No. 250.
- ⁵ 「板參甲第三〇一号」「5D參謀長→坂本支隊長宛」前掲「台兒莊反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. No. 260.
- ⁶ 『北支那作戦史要』第2部・第3章・第1節 作戦機密の一部（昭和13年1月－5月 青島問題及台兒莊附近の戦闘）JACAR：Ref. C11110923500. No. 480.
- ⁷ 「支隊長→師団參謀長 瀬谷支隊長」前掲「台兒莊反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. No. 261.
- ⁸ 「坂作報第二五七号」（瀬谷第九三号返）「支隊長→瀬谷支隊長宛」前掲「台兒莊反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. No. 258.
- ⁹ 「瀬谷少將→坂本支隊長」日付不詳、前掲「台兒莊反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. No. 259.

- 10 前掲『歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報』JACAR : Ref. C11111253800. No. 1082.
- 11 「坂作報第二六一号」「支隊長→瀬谷支隊長宛」前掲「台兒庄反転関係電報綴」JACAR : Ref. C11111465800. No. 264.
- 12 「坂作報第二四六号」「支隊長→瀬谷支隊長宛」前掲「台兒庄反転関係電報綴」JACAR : Ref. C11111465800. No. 263.
- 13 「支隊長→瀬谷支隊長宛」前掲「台兒庄反転関係電報綴」JACAR : Ref. C11111465800. No. 265.
- 14 「坂作報第二六七号瀬参第九号返」「支隊長→瀬谷支隊長宛」前掲「台兒庄反転関係電報綴」JACAR : Ref. C11111465800. No. 266.
- 15 「坂参甲第二一〇号」「5D参謀長→坂本支隊長」前掲「台兒庄反転関係電報綴」JACAR : Ref. C11111465800. No. 267.
- 16 「北支那作戦史要 第二章」JACAR : Ref. C11110927600. No. 1289. 配属転換の理由は師団間の不協調を避け、指揮系統の一元化と考えられる。
- 17 「5D長→坂本支隊長宛」前掲「台兒庄反転関係電報綴」JACAR : Ref. C11111465800. No. 268.
- 18 「坂作報第二七七号（坂参甲第二一六号返）」「支隊長→5D師団参謀長宛」前掲「台兒庄反転関係電報綴」JACAR : Ref. C11111465800. No. 271.
- 19 「楊樓附近戦闘詳報（第6号）」JACAR : Ref. C11111571500. No. 1181.1187.
- 20 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1115.
- 21 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1118-1119.
- 22 「歩六三戦詳第一四号附表其十七」より算出。前掲『歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報』JACAR : Ref. C11111253900. No. 1131.
- 23 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1119. No. 1120.
- 24 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1121-1122.
- 25 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1122.
- 26 「楊樓附近戦闘詳報（第6号）」JACAR : Ref. C11111571500. No. 1214.
- 27 「歩兵第六十三聯隊第二中隊陣中日誌」JACAR : Ref. C11111257500. No. 977.
- 28 「楊樓附近戦闘詳報（第6号）」JACAR : Ref. C11111571500. No. 1228.
- 29 「歩六三戦詳第一四号附図其八」および、現在の地図を比較、参照。前掲「楊樓附近戦闘詳報（第6号）」JACAR : Ref. C11111571500. 『歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報』JACAR : Ref. C11111253900. No. 1129.
- 30 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1122.
- 31 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1123.
- 32 「第二十軍団魯南会戦戦役戦闘詳報」前掲『台兒庄戦役資料選編』114頁。
- 33 「歩六三戦詳第一四号附表其十七」、前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1131.
- 34 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1125.
- 35 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1126.
- 36 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1128.
- 37 前掲「歩兵第六十三聯隊台兒庄攻略戦闘詳報」JACAR : Ref. C11111253900. No. 1128.
- 38 「楊樓附近第二中隊戦闘要報」「歩兵第六十三聯隊第二中隊陣中日誌」C11111257500. No. 982.